

関西圏の公立校への編入

-- 今日的な家庭のバックアップについて --

関西帰国生親の会「かけはし」 代表 片岡 晶子

北米にお住まいの皆様に帰国後の学校選定の参考に関西圏の情報提供を致します。

まず、大変残念ながら、皆様のご期待にそえる教育環境を持つ学校は極めて少ないです。

受入時のケア、語学教育の環境、現地校との教育の連係性などの面でバランスのよい環境を持つのは、帰国受入校である千里国際学園中・高等部が唯一だと思います。

他には、いずれかの分野に偏りますが、立命館宇治中学・

高校、同志社国際中学・高校、大阪教育大学附属高校池田校舎、現時点での啓明学院中学・高校、さらに、帰国生受験制度を持たない進学校の甲陽学院中学校などがあげられます。

しかしながら、多くを望まず視点を少し変えれば帰国生にとって居心地のよい私学は沢山あります。それに付きましては、次の機会に詳しくお話致します。

今回は、主に公立の状況について述べます。

はじめに

いずれの学校を選択するにしても、皆様には「帰国」ではなく「日本へ行く・日本の現地校へ入る」というように意識の持ち替えをして頂きたいです。意識変換が必要な程に現在の帰国生めぐる状況は激変しています。また、親は子どもを海外移動させる事への正しい知識を持つ必要があります。互換性の無い教育システム間や異なる学校文化間を移動する時には大きなストレスを子どもは感じます。この際の心的ケアがとても大切です。うっかりすると教育の空白期を生じさせることもあるからです。子どもが自己肯定できるためのバックアップを家庭が中心となってする時代になったことをご理解下さい。

公立小・中学校に編入する場合（現状と対策）

公立校編入の場合、『校区』があり、居住地が決まれば自動的に学校も決まります。私学と異なり編入に際してテストがありません。学校も本人も互いに選ぶという事ができないため、学校と家庭で価値観の同調・共有が難しく、場合によっては適応に苦労することもあります。この事も含め公立校の現状を簡単に説明します。

社会全体の帰国生やその教育に対する興味関心は非常に低下し、無関心と言い換えても良い状況です。しかし無関心ながらも社会全体はステレオタイプのキコクシジョを認知しています。このことが問題をややこしくしています。多様化した実際の帰国生と社会認知の間にギャップがあります。しかもそのギャップは、学校・先生の間にも存在します。「帰国生への学校案内《関西》2009」の取材でも愕然とする事がいくつもありました。自分の学校が帰国

生を含む国の事業指定のセンター校であることも知らず、やれと言われればするけれど国際理解教育などは迷惑だと言いつつ管理職や、公立は生徒を選べないから帰国生でもなんでも受入れるよという先生もいます。選べないのは子どもや家庭の側も同様ですから、互いに歩み寄りや協働が必要ですが、そのような意識は乏しいです。

また、多少帰国生に理解があっても「高い英語の力で一般生の牽引者になってほしい」とか「海外生活で身につけたものを他の生徒に刺激として与えてほしい」「国際性を発揮して」などをよく耳にします。必要以上に帰国生に個性を要求することもあります。私はこのような台詞を聞く度に「帰国子女搾取論が始まった・・・」と独り思います。帰国生のプラスの部分をとるばかりで、彼等のマイナス部分にどのようなことをしてあげられるかと云う方向へ学校側から話が及ぶ事は皆無です。子ども達にとっては「せつかくの海外経験」ではなく、それしか知らない普通の事なのです。そのような事への想像力は現場にはないようです。

また、未修の教科や日本語の語彙力の補強等は全て自己努力の世界です。また、2000年の帰国生教育の事業終了後の最大の影響として、相談窓口の消滅があります。教育委員会などでは「問合せ」窓口はあります。しかし、実際に皆様が尋ねたいのは、適応への不安や、未修の教科の補強や進学等様々な相談であります。それらの窓口がありません。このことが帰国生やその保護者、ひいては担当の教師の孤立を招いています。組織としてのバックアップはないからです。このようなところへ皆様のお子様は編入していきます。